

青衿第五十二号

TMU 文藝部

◇部長挨拶◇

こんにちは。文芸部部長の西川と申します。この度は青衿をお手に取っていただきありがとうございます。今回の青衿もコロナウイルスの影響により、インターネット上での公開という形をとることになりました。例年秋号は学祭号として文藝喫茶で販売を行っていましたが、今年はみやこ祭も中止となってしまいました。来年は製本した青衿を発行できることを願っております。

今回も素敵な作品が掲載されています。ぜひごゆっくりお楽しみください。

文芸部部長 西川知里

◇青衿とは◇

『詩経』鄭風・子衿の「青青たる子が衿」の句の注、「青青は青い領なり学生の服するところ」から、学生のこと。

小学館『大辞林』第二版より

◇ブログ「語り月夜」と Twitter に関するお知らせ◇

東京都立大学文芸部では「ゆえ」のバックナンバーを掲載するブログ「語り月夜」を運営しております。URL は下記のとおりです。ぜひご利用ください。作品に対するご意見、ご感想は随時受け付けておりますので、コメント欄に書き込んでいただくと幸いです。

また Twitter にて広報を行っております。そちらから「語り月夜」へ飛ぶこともできますので、併せてご覧ください。

その他、ブログに関してご意見、ご感想等がありましたら、下記のアドレスにご連絡下さい。

東京都立大学文芸部『語り月夜』

<http://tmubungei-yue.seesaa.net/>

Twitter アカウント

@tmulc

メールアドレス

[tmubungei.yue@gmail.com](mailto:tmubungei.yue@gmail.com)

◇目次◇

青衿 第五十二号

月夜

朝霞

…3

現実と幻想の違いとは

風影 露

…4

自由の子供たち

深山わたる…7

無意味に棒と歯車を回す意味のある仕事

紺野透

…37

月夜

朝霞

ごり、ごり。体を内側から震わせるような奇妙な音で、少女は目を覚ました。

体を起こして目をこすり、きよろきよろと部屋の中を見回す。ゆっくりと大きな毛布を這い出ると、ベッドからすとんと下りた。

ごり、ごり。重い石同士をゆっくりすり合わせるような音は、大きくなく、それでいてはつきりと聞こえる。

しばらく経って目が慣れてくる。もう一度部屋の中を見回してみても、おかしいところはない。少女は窓辺に立つと、しゃあっと勢いよくカーテンを開けた。青白い月明かりが部屋に注ぎ込んでくる。

その眩しさに、思わず腕で目をおおう。おそるおそる窓の外を覗き込んで、「あっ」と小さな声をあげた。

ごり、ごり。音は、空高くから聞こえていた。夜の闇をやさしく照らす丸い月。そのはしっこを、夜空と同じ色をした大きな影がかじっている。

少女は窓を開けて身を乗り出し、空に向けて訊ねた。

「あなた、お月さまを食べているの？」

すると、大きな影はゆっくりと少女の方に向き直り、「ああ、そうだと答えた。暗くてよく見えないけれど、影が少し笑ったような気がした。

少女は少し考えてから、もう一度訊ねた。

「おいしい？」

「ああ、とても」

見えないけれど、確かに影は笑ったようだった。少女も笑顔を返してから、ふと心配そうな顔になる。

「あなた、お月さまをぜんぶ食べてしまうの？」

「ああ、そのうちに」

少女は悲しそうに問う。

「そうしたら、もうお月さまは見えないのかしら」

「いや。次の月が育つ。それをまた食べる。その繰り返し」

ゆったりと響く影の声は、少女に不思議な安心感を与えた。

「よかった。今度わたしにも味見させてね」

「ああ、そのうちに」

少女は影におやすみを告げ、ベッドに戻った。ごりごりという音は、その日はもう鳴っていないなかった。

現実と幻想の違いとは

風影 露

———こんなことはあり得ない。だからきつとこれは私の夢。

「……むら、月村。どうしたの？」

声が聞こえて、ゆっくりと視線を向けると見慣れた顔が私のことを怪訝そうに見上げていた。幼馴染の日坂音奈さんだ。辺りを見回すと下校中にぼんやりしていたらしく、学校を出てすぐの階段に差し掛かるところだった。かなり急で長い階段だから上の空のまま降りたら足を滑らして危なかったかもしれない。

「……ぼんやりしてた。ごめん、何の話？」

私が少し目を瞬いていうと、少し不満げな顔をされた。高校生にもなって相変わらず表情豊かだなと心の中で苦笑する。この前、バイト先で年下に見られたと怒っていたが、これでは年下だと間違われても仕方ないだろう。

「別にたいした話でもないけどさくテスト疲れ？」

音さんが気遣うように顔を覗き込んできたので、慌てて首を振った。

「いや、大丈夫。ちゃんと休んだから。……まだしばらくは暇にはなれなさそうだけど」

あつちに締め切り、こつちに締め切り、模試に定期テスト。やるこたがなくなる気がしない。受験生にもなって暇になれると思ってる私が悪いんだろうけど。

「ほんと、5・6月って忙しいよね。去年もテストと文化祭の準備に追われてるうちに過ぎてっちゃったよ」

口調こそうんざりしているが表情は明るい。音さんは前から行事は人一倍張り切っていたから楽しみなんだろう。特に、うちの高校の文化祭は二年生以上の全クラスが劇を行うから、演劇部の音さんはまさに水を得た魚というやつだった。

軽い足取りで一歩先を歩く音さんにそうだね、とうなずきかけて違和感に止まる。つい一年前のことなのに去年の文化祭のことが思い出せなかった。自分のクラスが何を上演したかは覚えてる。しかし、音さんのクラスが何を上演したのかは思い出せなかった。そもそも、音さんはどのクラスだっただろうか。

（去年、音さんのクラスは何をしただろう？私ほちゃんと見に行けたんだっけ？……私のクラスには見に来てくれていたんだっけ？）

音さんは文化祭の舞台に立っているはずだ。私が見に行っていないはずがない。だけど、不自然なくらいに何も思い出せなかった。

私は、自分の記憶力に自信があるわけでもないから忘れてしまったのだろうと無理やり納得して深く考えないことにした。

「月村？……大丈夫？今日なんか変だよ」

音さんは振り返って心配そうに尋ねた。本当に今日は自分でもおかしいと思う。いつも通りのはずなのに、些細なことがやけに気になる。ざわざわとした感覚はそれこそ、寝不足で神経がとがっているときみたいだ。

「……やっぱ、気がついてないだけで疲れてるのかも」

私が苦笑交じりに言うと、音さんは少し呆れたような顔をする。

「月村は集中するとすぐにこれだからなあ。どうせ気づいたら夜中だったとかでしょ」

ああ、このやり取り懐かしいなど思い少し笑みがこぼれた。

「まあ、そんなとこ」

最近は時間通りに生活しているんだけど、これ以上は追及されると困るので曖昧に頷いておく。こんなに人から心配されるのも久しぶりなので、何だか変な感じだった。

「それより、今年は私のクラス見に来てよ」

今年はってことは去年は行けなかったんだっけ？とか思いつつ頷く。

「舞台でるの？」

「なんと、私が主役をやるんです！」

「それじゃ、冷やかしに行かないとね」

胸を張って言う音さんに私がいつも通り少し軽口を言うが、音さんからは何の返しもなかった。不思議に思っただけを見ると、音さんが驚いたような何とも言えない顔で見つめ返してきた。

「どうかした？」

私が尋ねると、音さんははっとしたように大きく瞬いた。

「いや、月村が珍しく冗談とかいうから驚いて」

「そうだっけ」

今度は私が不思議そうな顔をする番だった。確かに冗談が得意かと言うとそうでもなく、あまり気の利いたことは言えない。しかし、

だからといって全く冗談を言わないわけでもなかった。むしろ、最近是我ながらすぐ軽口を叩くようになったと思っただけでいいのに。音さんは視線を前に戻すと明るく声で尋ねた。

「それより、月村は出ないの？」

あからさまにそらされた話題に少し安堵すると、首を振る。

「いや、私は特に」

「へえ、意外」

音さんの言葉に私は首を傾げる。意外というか、大抵そうだろう。実際去年も舞台には上がらなかった。中学の頃は舞台で演じることが好きで音さんと同じ演劇部に所属していたけど、今ではすっかり裏方として舞台を作りあげる方が面白いと感じるようになっていた。自分が作った舞台の主演を、音さんに演じてもらうことが今の私の夢だ。演技している音さんはいきいきとしていて、その姿を見ている時間が一番好きだった。

「そういうわけで、当日は多分見に行けると思う」

私がそう言うと、やっと音さんはいつも通り明るく笑って頷く。

「ありがとう。月村を感動させられるよう頑張るよ」

「楽しみにしてるよ」

冗談めかして言う音さんに、少しほっとして私も笑い返した。

なんだか今日は二人ともおかしい。でもまあそんな日もあるだろう。きっと明日にはいつも通りで、音さんは明るい笑顔で文化祭のことを話して、私はそれに相槌を打つんだろう。これまでも、これからもきつとそれは変わらない。そうだったらどんなに良かったか。

(このまま目覚めたくないな)

私はもう気が付いている。音さんの姿が中学生のままだったことに、音さんの言う私が中学生のままだったことに。あの頃のまま変わらないんじゃない。あの頃そのものなんだ。

「音さんと私は友達だったよね」

「ん？そうだね」

私の呟きに音さんは不思議そうな顔をしつつも何のためらいもなく肯定した。私の最後に見た音さんはこんなまっすぐな表情をしていなかった。どこか怯えたように、変に明るい笑顔を浮かべていた。あの笑顔が怖くって、罪悪感が募って私は音さんの顔が見られなくなった。

「なら、どうして何も話してくれなかったの？」

「何のこと？」

思わずこぼれてしまった呟きに、音さんは眉根を寄せた。この音さんに言っていたって仕方がない。でも、この音さんだって私に自分の悩みを打ち明けたりしないんだ。私は自分は音さんの理解者で親友だなんて思ってたけど、たぶんそれは嘘なんだ。誰から何と言われなくても自分は音さんの親友だったって自分に言い聞かせてきた。それでも本当は知っていたんだ、音さんにとって私は特別じゃないって。それを知ることが怖くて聞けなかった。だけど、夢の中でなら聞ける。もし、嫌な答えだったら夢だからって信じなければいいんだ。「音さんが困っても私に相談しない時ってどんな理由かなって思っ」

私が軽い口調で尋ねると、音さんは少し考えてから答えた。

「それは……」

.....

「なにやってるんだろうな」

私は枕に顔をうずめて呻いた。夢であんなことを言うなんてどうかしていたとしか思えない。だけど、妄想とはいえ久しぶりに音さんと話せたのは楽しかった。それに、最後に聞いた音さんの言葉は思いのほか嬉しいものだったから。所詮、私の願望でしかないんだけど、でもよくよく考えればそもそも音さんが自分のこと大切だと思っただけかもしれないという考え自体が想像なんだから、同じ想像なら自分に都合がいい方を信じてみようと思う。

「音さんも、たまには私のことを考えてくれるのかな」

私はためらいながら電話帳から音さんの電話番号を呼び出した。もし、音さんが出たらなんて言おう。だけど、何を話してもいいのかもしれない。だって私と音さんは友達なんだから。

終わり

自由の子供たち

深山わたる

アラスカ戦線崩壊以降の人口流出で廃墟となったノースリッジの住宅地を、エリックの運転で突き進む。道路の左右に整然と立ち並ぶ廃屋はほとんどが一階建てか二階建てで、こぢんまりとした前庭と車庫が付属していた。

僕は鉛ガラス越しにそれを眺めながら、廃棄される以前にこの家々で営まれていた生活を想像しようとし、失敗する。僕は一軒家というものに住んだことがなかった。

ここには居住する人間がいないのだから当然、除雪する人間もない。だから住宅にも道路にも雪が降り積もっていた。雪の重量で押し潰されたらしき家屋の残骸もあった。雪はその上にも静かに降り続けている。

道路の状態も悪かった。路面の陥没を反映してその上の積雪も凸凹しており、徐行させただけでも車は頻繁に振動した。倒木のために道路の半分が塞がれている場所もあった。僕が道順を指示するのを聞きながら、エリックが忌々しげに言った。

「道路が穴だらけだ。尻が痛い」

「安心しろ。あと二回曲がれば目的地だ」

不意に車内にザザザ、という音が響いた。車載無線に激しいノイズが走ったのだ。僕は首を振り窓の外を観察する。四時の方向の空が明るかった。灰色の雲の隙間から、薄い光が差している。その真下

にはロサンゼルス市の中心市街があるはずだった。

「停車しろ。核爆発だ」

僕が言うと、エリックはすぐにブレーキを踏んで車を停めた。振り向いて後方を確認すると、後続のグロウヴァーとトンプソンの車も停まっている。僕はエリックと共に頭を抱えて身を伏せた。

数十秒が経過して、風音と共に車体が大きく揺れた。しかし車体が飛んだり滑ったりするようなことはなく、振動もほどなくして収まった。爆発が起こったのは中心市街の直上ではなく、そのはるか先の海の上らしい。

僕は身を起こすと言った。

「今のはスプリントだな。沖合で弾道弾を迎撃したんだ」

「じゃああのノイズはスパルタンの爆発か。しばらく無線は使えないな」

エリックが雑音を垂れ流し続ける車載無線の電源を切った。現代の電子機器は放射線や電磁波に対して嚴重に防護されているため単には故障しないが、高高度核爆発の後しばらくは無線が混乱するのが普通だった。

僕たちは安全を確認すると再び車を発進させた。地図に従い道路を進むと、すぐに目的の場所に着いた。ロサンゼルス市警の車両が何台も停まっていたため、似たり寄ったりな廃屋の中から目的の建物を見つけるのは容易だった。敷地は立ち入り禁止の黄色いテープで囲まれている。

「雪に放射性降下物が混じってる。傘を忘れるなよ」

「わかってるよ、ケヴィン」

車を止めると、僕たちは慎重に防塵マスクを着けて防護フードを被り、車を降りた。道路には一インチほどの積雪があり、ブーツに包まれた僕の足がそれを軽く踏み抜いた。放射性降下物が混じっているはずの雪を被らないように、素早く傘を差す。

僕たちの車両に続いて、グローヴァーとトンプソンの車両も現場に到着した。「ATF」の文字が塗装された側面ドアが開き、二人の捜査官が姿を現す。僕たちはこのチームのリーダーであるグローヴァーの元に集まった。

グローヴァーが廃墟を眺めながら言った。

「懐かしいな。俺が若い頃はみんなこんな家に住んでいたんだ」

「へえ。玄関扉も窓ガラスも無い家でさぞ寒かったでしょう」

エリックが混ぜ返したので、僕とトンプソンは防塵マスクの中で噴き出した。さらにグローヴァーが「俺が若い頃はこんなに寒くなかったからな」と言ったので、一同は笑いに包まれる。

その扉の無い玄関から、二人の男が姿を現した。防塵マスクのため顔は判然としないが、ロサンゼルス市警の制式防護コートを着用している。前庭を突っ切り道路に出てきた二人の警官に対し、僕たちはIDカードを提示した。

「アルコール・煙草・火器および爆発物局捜査官、リチャード・グローヴァーだ」

「同じくATF、ケヴィン・UN052・ジョーンズ」

「エリック・EH054・ダグラスだ」

「パトリック・KK071・トンプソンです」

二人の警官は敬礼をする。

「お待ちしておりました。ご案内します」

建物の中は外に負けず劣らず荒れ果てていた。玄関ポーチに直通したリビングでは、住民が退去した際に放置された家具や調度が高く埃を被っている。僕はそれに目を奪われそうになるが、二人の警官はリビングを素通りしていった。寝室にはボロ

ボロに摩耗した寝台が二台あり、その足下に地下に通じる階段が口を開けている。案内役の一人が階段の下に姿を消し、一分ほどして一人の男と共に戻ってきた。容貌や姿勢から四十歳ぐらいと推測できる、顔面の大きな潰瘍痕が目立つ男だ。

古びた防護コートに身を包んだ老人は猜疑に満ちた視線でしばしば僕たち四人を観察すると、ふんと鼻を鳴らした。

「連邦捜査局、ジェフ・ウインスローだ」

「ATF、リチャード・グローヴァーです」

「規則通りにATFを呼んだが、孤児の若造ばかりか」

「能力は保証しますよ」

「ふん。まあいい。付いてこい」

ウインスローはそれだけ言って踵を返すと、階段の暗闇に姿を消してしまった。グローヴァーとトンプソンがそれを追いかける。僕が続こうとしたところで、エリックが囁いてきた。

「あのジジイ、なんか感じ悪いな」

「年寄りだからな」

現在、三十歳以下のアメリカ国民はほとんどが孤児なのだが、老人の間には未だに根強い偏見が存在する。曰く、孤児は両親に愛情を寄せられていないから精神が未熟だとか、政府に思考を操られているから感情が希薄だとか。僕としてもそんな戯言を信じる人間との付き合いは願い下げだったが、仕事だから仕方が無い。

階段を降りると、そこは一階のリビングと同程度の床面積の部屋だった。壁際に素性不明の機材や資材が置かれ、そして部屋の中央には死体が二体、転がっている。

僕は身をかがめてそれを観察した。いずれも性別は男性。身体や衣服、周辺の床に大量の吐瀉物がこびり付いており、首筋から顔面にかけて壊死が見られる。高線量放射線被曝による急性放射線症候群。X線銃で撃たれた結果だろう。

「検死はLA市警の鑑識がやった。解剖はFBIがやる。必要なら後で記録を回す」

視線を上げると、ウインスローが僕を見下ろしていた。彼は自分の現場に他人が介入することを嫌っているのだと察し、僕は素直に死体から離れる。

グローヴァーがウインスローに尋ねた。

「ここは核シェルターでしょうか」

「当初の設計の上では、そうだ。だが住民が退去した後にテロリストどもが来て、秘密基地に改造した。本来は一個の小部屋だったのを拡張し、増築し、隣の家のシェルターと連結した。お前たちに見せ

るものはこつちだ」

ウインスローに案内されたのは縦横十フィートほどの小部屋だった。まず、部屋の奥の壁際に俯せに倒れている女性の死体が、目に入る。頭部の周囲にはおびただしい量の吐瀉物が水溜まりを作っていた。それから、右手の壁際に置かれた、兵士の背囊のような物体に気付き。僕たち四人はそれに歩み寄り、取り囲んだ。

ウインスローはあまりそれに近づきたくないらしく、部屋の外で廊下の壁にもたれている。

トンブソンが呟いた。

「これが……」

ウインスローが観念したように言う。

「ああ。超小型核爆弾。その方面に詳しいらしい俺の部下によるとキロトン級ということだが、どうだ？ 合ってそうか？」

超小型核爆弾の嚆矢となったのはアメリカ海兵隊が開発した特殊原子爆破資材(SADM)とされる。SADMはW54核弾頭を搭載し、十トンから一キロトンまで出力を変更できた。

同様の兵器は西側はイギリスやフランス、東側はソヴェトや中国、第三世界はインドでも開発された。当初はそれなりに嚴重に管理されていたが、永続戦争が開戦すると共に瞬く間に小国やテロ組織に拡散した。

重量十キログラム、出力十キロトンの超小型核爆弾は、誰にも気

付かれずに都市に持ち込むことができ、都市を焼き尽くすことができる。五大国を含む世界中の大都市が超小型核爆弾で壊滅し、小国はそのものが消滅することもあった。アメリカ政府は国内で最初の超小型核爆弾によるテロであるニューヨーク爆撃をきっかけに財務省のアルコール・煙草・火器局を司法省のアルコール・煙草・火器・爆発物局を改組し、超小型核爆弾の取締に躍り上がった。

「慎重にやれよ……」

僕たちが爆弾を背囊から引っ張り出すのを遠目に見ながら、ウインスローが言った。あと数年もすればガンで死ぬだろうに、目の前の核爆弾が怖いらしい。

エリックが言った。

「安心して下さい。恐らく安全装置がかかっています」

「おお……じゃあそれをいじるなよ」

「言われなくても、そういうことはモハーヴェでやりますよ」

爆弾の外観を観察する。国防総省により《サードニクス》の通称が与えられた中国製超小型核爆弾の、複製のようだった。昨年、ナッシュビルで百万の死者を出したものと同型だ。

「時限装置は起動していない」

「五重の安全装置……。《サードニクスC》とほぼ同じだな」

「じゃあ出力は一キロトン……施設破壊用ですね」

「何を破壊するつもりだったんだ？」

爆弾を検分する僕たちに、ウインスローが紙束を差し出した。

「別の部屋で発見された書類だ。『核爆弾』という単語は避けられて

いるが、この核爆弾の説明書のようなものらしい。この書類を発見したから、その正体がわかった」

グローヴァーがそれを受け取り、目を通す。

「回りくどい書かれ方をしていますが、そのようだ」

それからウインスローは事件の経緯を説明した。

「俺たちは《ヒューマン・ビーイング》というテロ組織を内偵していた。反孤児を掲げて製造工場や孤児院に破壊工作をしかけている組織だ。俺たちは奴らの拠点がここにあることを突き止め、今日の未明に踏み込んだ。そのときにはこの有様だ。入口は開け放たれたままで、X線銃で殺された死体が三体と、超小型核爆弾が一発転がっていた」

部屋にロサンゼルス市警の警官が駆け込んできた。額に汗の滴が光るのが見える。僕は核爆弾の間近でFBIの使い走りさせられている彼らに同情した。彼はウインスローに言った。

「エイヴリー捜査官がATFの捜査官をお呼びです」

「わかった。着いてこい」

僕たちはウインスローに連れられ、資料保管室と思わしき部屋に足を踏み入れた。四方に書棚が置かれ、紙束が乱雑に詰め込まれている。部屋の中央の机で、FBIの捜査官が一人、書類を検分していた。

ウインスローが言った。

「エイヴリー、何が見つかった」

「計画書らしきものです。こちら『核爆弾』などの特定の言葉を避

けた書き方をしていますが」

エイヴリーは机の上から一束の書類を取り上げ、ウィンスローに渡した。ウィンスローはばらばらと紙を捲り目を通す。エリックがウィンスローの肩越しに書類を盗み見ようとしたので、ウィンスローが迷惑そうにエリックを小突いた。

「場所の名前は具体的に書かれていないが、攻撃の目標は三か所らしい。三か所を連続で攻撃するつもりだったようだ」

ウィンスローの言葉にトンプソンが怪訝な表情をする。

「三か所？ 爆弾は二発しか無いんですよね？」

「ああ。だから持ち去られたと考えるのが自然だな。恐らく、誰かが三人を殺害して爆弾を奪ったんだ。二発しか奪わなかったのは、必要が無かったからか人手が無かったからだろう。犯人が組織の内部の人間か、外部の人間かはまだわからないが」

「それはなんと……俺たちの仕事が増えて良いな」

エリックだけが笑っていた。

資料の探索をエイヴリーに任せて爆弾が保管されていた部屋に戻る途中、二人の警官が担架を担いでいるのに出くわした。担架で運ばれているのはあの女性の死体のようだ。

ウィンスローは警官の一人に言った。

「無線は回復したのか？」

「はい。これからFBIのLA支局に移送します」

「わかった。気をつけろ」

最近、廃棄地区を走行する警察車両が武装集団に襲撃される事件

が相次いでいた。襲撃の大半は核爆発の影響で無線が不通になった間に行われていた。そのため無線が不通の間は極力、廃棄地区で車両を走行させないようにしていた。

僕は担架とすれ違った瞬間に、女性の死体に視線を向けた。その行動に意図はなく、人間の顔が視界の端に映ったので、そちらに視線が吸い寄せられたというだけのことだった。

僕と同じ二十五歳ぐらいの年齢と推測できる彼女の、俯せに倒れていたときには見えなかった顔が見えた。それが、僕が知る人物の顔によく似ていることに気が付き、僕はしばし驚いた。

僕は子供時代、シアトルの郊外にあるワシントン州立第八孤児院で生活していた。〇歳から一五歳までの子供千人が入居する、大規模な孤児院だ。だから設備は綺麗だったし、職員も親切だった。他の子供との共同生活は窮屈だったが、清浄食の横流しが常態化しているような田舎の小規模な孤児院よりはずっと、幸福な子供時代を過ごせたと思う。

そこに僕と同年のスーザン・ワイモアという少女がいた。ロットネームは無い。《自由の子》ではないからだ。彼女は人工子宮ではなく、人間の子宮から生まれてきた。一九七九年まで人間の妊娠は合法だったため、五年ほど前まで孤児院には家庭で生まれた子供もいた。スーザンは七歳のころに両親が事故で亡くなり、孤児院に入ったらしい。

ロットネームが無い子供は他に何人もいたが、スーザンはとびきり変わった子供だった。彼女は学校の授業の後はいつも図書館にもついていたが、ときどきそこを飛び出すと、手近な子供を捕まえて新しい知識を披露するのだった。

「ねえねえ、家庭の子供は両親の収入が高いほど将来の収入が高かったんだって。そしてそれは両親の収入が高いほど上等な教育を受けられたからなんだ。なんて不公平なんだろう。私たちは孤児院で平等に教育を受けられて良かったね」

そんな奇妙な知識を披露するものだから、彼女は男の子からも女の子からもいじめられた。孤児院では百人たらずの大人が千人もの子供を監督していたので、監視の目が行き届いておらず、スーザンは悪口を言われたり暴力を振るわれたりした。当然、蘊蓄を披露する相手も減っていった。

最後まで彼女の蘊蓄を聞いていたのが、僕だったと思う。なぜ他の大半の子供のように彼女を避けなかったのか、今となっては記憶に無いが、彼女の境遇を知っているのはそのためだ。

付け加えると、永続戦争以前は人間は人間の体内から生まれるのが普通だったことも、僕は彼女が披露する蘊蓄で知った。孤児院の大半の子供は、小学校三年生の社会科学見学で見たように、人間は製造工場の人工子宮で凍結精子と凍結卵子から生育されるのが当然だと認識していたのだ。

「私の名前、ファーストネームとファミリーネームの間に文字と数字が挟まってないんだ。それは私がみんなと違って人間の両親から

生まれたからなの」

「両親というのは、前に言っていた、子供を産み育てる男性と女性のことだよ。前から疑問だったんだけど、人間から人間が生まれるの？ 子宮からではなく？」

「みんなを生んだのは人工子宮。本来、子宮というのは女性の体内にある、人間が人間を生むための器官なの。子供がみんな人工子宮から生まれるようになったのは最近のことで、孤児院の職員も小学校の先生も、大人はみんな人間の体内から生まれてきたんだ」

「ふーん。よくわからないけど、赤ちゃんを体の中に収めるのは大変そうだね。出すときは手術みたいにお腹を切るのかな」

「女性の体の中には子供を体の外に出すための通り道があるらしいんだけど、それでも女性が子供を産むのはとても大変なことだったんだって。とても痛くて苦しいらしいし、母親か子供あるいは両方が死んじゃうこともあったんだって。それに比べれば、人工子宮で子供を産むのは安全で良いよね」

小学校六年生まで、スーザンは家庭で子供を産み育てることの欠点を指摘することを好んだ。そうすることで、両親を亡くした自分の境遇を肯定したかったのだろう。しかし、そうした態度は中学校一年生の時に百八十度変わった。それは皮肉にも、愛国教育の授業を受けたのがきっかけだった。

愛国教育の最初の授業の後、スーザンは言った。

「私たちは政府に産み育てられてきたから国家に貢献する義務がある、なんて変だと思う。そもそも私は政府に育てられているけど政

府が産んだのではないし」

国家に貢献することを正義とする風潮は、愛国教育の以前から子供たちにあった。十三歳にもなればわかる、子供が赤ん坊の頃から職員や教師がそう刷り込んできたからだ。子供が無能な友人を罵倒するお決まりの言葉は「お前は国の役に立てない」だった。そうした規範が明言されたのが愛国教育の授業だった。

僕は尋ねた。

「君はアメリカが嫌いなの？」

僕は周囲の大人による刷り込みの成果と知りつつも、愛国教育の授業を素直に受け止めていた。自由主義陣営の盟主にして世界最高の経済力、軍事力、科学力を保有する祖国アメリカを、十三歳の僕は素朴に愛していたし、貢献したいとも思っていた。

スーザンは言った。

「ううん。私を育ててくれている政府には感謝しているよ。でもそれとこれとは違うじゃない？ 貢献しろなんて恩着せがましく言われても不快なだけ。私は自分が生きたいように生きる。自由ってそういうことじゃない？」

今にして思えば、彼女は自分の愛国心から自主性が失われるのを嫌ったのだろう。良くも悪くも彼女は自主的な少女だった。両親を亡くしたときに、自分の選択で生きることを決意したからなのかもしれない。

それから愛国教育の授業のたびに、彼女の祖国に対する反抗心や不信感は膨れ上がっていった。しかしここは自由の国だ。学校の教

師たちはスーザンのそのような態度を許容した。

一方で他の子供によるいじめは苛烈になった。彼女と仲の良い僕も標的となり、陰湿な暴力や悪口、嫌がらせにおびえて生活することになった。僕たちは孤児院を卒業する年齢である十五歳まで、それらに耐え続けなければならなくなった。

やがて一九八九年の春になり、アラスカ戦線が破綻し、シアトル爆撃が開始された。僕たちはワシントン州避難民となり、バラバラになった。

この事件には捜査しなければならないことが三つあった。一つ目は《ヒューマン・ビーイング》の目的・成員・拠点など、二つ目は核爆弾の行方、三つ目は核爆弾の出所だ。

一つ目はFBIが担当し、事件の発覚の三日後に最初の報告もたらされた。ATFロサンゼルス支局のオフィスで、グローヴァーがそれを読み上げた。

「三体の死体の身元についてだ。IDチップの情報をARPAネットワークで照会したところ、三人はそれぞれカイル・UB112・ゲルマン、ダリル・US101・デーモン、グレイス・UN052・サリヴァン。全員、ケヴィンと同じワシントン州避難民だな」

「それなら偽装でしようね」

僕はこともなげに言った。

一九八九年、ソヴィエト連邦軍によるシアトル爆撃の結果、ワシ

ントン州全体が居住不能地域となり、二百万人の州民が国内難民となった。

当時はアメリカ全体で情報を共有するARPAネットが発達していなかったため、国民の情報は州政府のローカルなデータベースにしか保管されていなかった。そのためワシントン州民の個人情報もシアトル爆撃によって失われた。

また当時の皮下埋蔵式IDチップは放射線や電磁波に対して脆弱であり、核攻撃に晒されたワシントン州避難民のIDチップの情報は、大半が破損してしまった。

そのため周辺州に押し寄せる避難民には新たにIDが発行されることになったが、犯罪組織がこれに目を付けた。混乱を利用してシアトル爆撃で本来は死亡した州民のIDを作成し、使用可能な状態にしたのだ。こうした偽造IDは百万以上も存在し、違法に売買され犯罪に使用されているという。

三体の死体のIDも素性を秘匿するための偽装だろう。テロ組織の構成員にはよくあることだった。

グローヴァーは続けた。

「ああ。それに反孤児組織の成員が孤児ばかりとは考えにくい。FBIもその点を考慮し、死体のDNAを政府のデータベースに照会した。すると該当の国民は存在しないことがわかった」

「該当の国民は存在しない……？　すると、カナダかメキシコからの不法移民でしょうか？」

エリックがトンプソンの疑問に答える。

「いや、《ヒューマン・ビーイング》が反孤児組織であることを考えると、二十歳未満らしいカイルとダリルは違法出生児だと考えた方が自然だろう」

二十年前の一九七九年、アメリカの人口生産は保健福祉省管轄の製造工場による人工出生に完全に移行し、人間の出生は違法となった。しかし人間の出生が不可能となったわけではない。放射能汚染により生殖能力を失わなかった人間は少数だが存在し、そうした人間が子供を産むことがあった。

そうして出生した人間が違法出生児である。

グローヴァーが頷いた。

「それを裏付ける証拠も存在する。ダリルとカイルの死体には晩期放射性症候群の症状が見られたそうだ。彼らは子供の頃から汚染食を摂取してきたんだ」

「野良の子供か。妥当な推測だな」

エリックが吐き捨てるように言った。

アメリカでは現在、違法出生児の権利は保障されていない。それどころか、政府の人口生産計画から逸脱する違法出生児は発見され次第、保健福祉省の児童家庭局に安楽死処分されている。

こうした処置は残酷だという批判もあったが、人口生産の最適化という大義名分により正当化された。今の時代、優秀な形質を持たない凡庸な子供に与える清浄食は無いのだ。

僕は思案する。

カイルとダリルが本来は違法出生児であるという推測には納得で

きる。不明なのはグレイスについてだ。グレイスの正体がスーザンであるならば、なぜ彼女の情報が政府のデータベースに存在しないのだろうか。あるいは彼女はシアトル爆撃の時から――。

「ケヴィン、報告しろ」

グローヴァーの声が思考を遮断した。どうやら死体の素性についての話題は終わつたらしい。僕はグローヴァーに促され、《ヒューマン・ビーイング》の拠点を搜索した成果を報告する。

「ノースリッジの拠点に残された文書から、超小型核爆弾の入手先が中国系武器密輸組織《ファイア・ボール》であることがわかりました。またロサンゼルスにおける《ファイア・ボール》の拠点の場所は今まで不明でしたが、文書の分析によりヒストリックコアに存在することが判明しました」

「ふむ。核兵器密売人は核テロに巻き込まれないために販売相手の内情について綿密に調査する。《ファイア・ボール》に当たってみる価値はありそうだ。ケヴィン、それにエリック。SRTを使ってヒストリックコアの拠点を確保しろ」

「了解」

それからグローヴァーはトンプソンに言った。

「犯人の正体や行方についてわかっていることは？」

「ノースリッジの拠点には男性三人と女性三人の六人が生活していた痕跡がありました。死体で発見された男女を除く三人が犯人だとすると、犯人は《ヒューマン・ビーイング》の仲間ということになります」

「仲間割れを起こし、一方が核爆弾を奪取し逃走、ということか」

「犯人の行方についてはほとんどわかっていません。この一週間にノースリッジの地区検問所を通過した一般車両はありませんでした。犯人は徒歩で逃走したものと思われれます。またLA市警が通行人に対する検問を強化していますが、今のところ不審な人物は発見されていません」

ニューヨーク爆撃で落成直後の世界貿易センターが倒壊して以来、政府は人間の移動に対する監視を強化してきた。しかし全ての人間の行動を把握するには人間の力も機械の力も足りていないのが現状だった。

グローヴァーが腕を組んだ。

「やはり犯人の行方を直接、掴むのは難しいか……」

「ええ。核テロのほとんどは組織によるもので、所帯が大きいだけに発見が容易でしたが、今回は少数の人間による犯行なので追跡が困難です」

核爆弾の行方の搜索と核爆弾の出所の調査とでは、前者が圧倒的に緊急度が高かったが、しかしそれは停滞しつつあった。グローヴァーは僕とエリックを見据える。

「ならば《ヒューマン・ビーイング》という組織の内情を探ることで、その一員であった犯人の目的を知るほかに無い。《ファイア・ボール》の拠点を確保を急いでくれ。このままでは、アメリカのどこかで一キロトンが炸裂することになる」

ロサンゼルス市街の上空に立ち込める黒雲から、一個二個と雨粒が落ちてくる。それは急速に数を増し、大雨となった。雨粒が地面を叩き、流れ、側溝を溢れさせる。傘を差していても、暴風に吹かれた雨粒が顔を叩いてくる。

僕は目の前の建物を見上げる。そこにあるのは十階建ての古いオフィスビルだ。ヒストリックコアのその歴史ある建物は、雲と雨のおかげで陰鬱な気配を漂わせていた。

遅れて到着した濃紺の装甲車両から、ATFの特殊対応班（SRT）の隊員がぞろぞろと降りてきた。彼らは装備を抱えてオフィスの玄関に入っていく。最後の隊員が建物に入ったところで、僕とエリックもそれに続いた。

『狙撃班、配置完了』

「突入班、二階を通過」

五階まで一気に階段を駆け上る。優秀な体力を誇るSRT隊員を追いかけるのは骨が折れた。僕とエリックが五階に到着したころには、彼らは目標の部屋の前で突入の準備を完了していた。

「突入班、準備完了」

『突入を許可する』

「了解」

僕はグローヴァーの通信に返答すると、ハンドサインで隊員に突入の指示を出した。合図を視認した先頭の隊員がすでに準備していた破城槌で素早く玄関扉を破り、X線銃を構えた後続の隊員がする

すると部屋に滑り込んでいく。

僕たちが待機する廊下まで閃光手榴弾の爆音が何度か響き、それに男性の怒声が重なった。しばらく待つと周囲は静寂に包まれ、僕の通信機にSRTの班長から通信が届いた。

『突入班、制圧完了』

僕たちは破城槌で破られた玄関を通った。室内は一見すると普通の社事務所のようで、僕は感心してしまう。実際、取り扱う物品が違法なだけで、ここは商品を買付け顧客に売り付ける商社なのだった。

部屋では、四人の男がSRTに拘束されていた。いずれも黄色人種だ。すでに両手に手錠をかけられており、抵抗する意思はないようだった。エリックはその中の禿頭の男に近寄ると、彼を指さして言った。

「お前が《ファイア・ボール》の支部長？」

「だったらどうする？」

中国系武器密輸組織《ファイア・ボール》のロサンゼルス支部長、ワン・ダングオと目されるその男は言った。

僕はエリックに並び立ち、ワンに問う。

「お前たちが一キロトンを三発売った《ヒューマン・ビーイング》という組織について聞きたい。お前たちはテロの巻き添えを食らわなために核兵器を売る相手の計画を入念に調査しているはずだ。彼らが何を攻撃の目標としていたか言え」

「私たちは顧客の情報は売らない……」

「《ヒューマン・ビーイング》が不用意に残した記録が原因でこの場所が割れたのだとしても？」

「私たちは顧客を信頼する……」

すると、エリックが腰のホルスターからX線銃を抜き、ワンの禿頭に突きつけた。銃身の後端にあるダイヤルを親指で撫で、X線銃の出力を調整する。

「この出力で一秒、X線を照射すると、お前は二十グレイの全身被曝をする。するとどうなるか。全身の細胞のDNAが破壊され、細胞が増殖できなくなる。人間の細胞は日々古いものから新しいものに入れ替わっているが、大量に被曝すると古い細胞が死んでいくだけになるんだ。二十グレイの被曝では即死はしない。何日もかけて体がドロドロに分解していくことになる。地獄の苦しみだぞ。お前のハゲ頭もズル剥けた。そうなりたくなかったら早く吐け」

「そんなことは知っている。だが言わんね」

エリックは拘束された別の男にX線銃を突きつけた。

「じゃあお前。お前が吐け」

「お、俺は言わねえ」

男の言葉が終わらないうちに、エリックはX線銃のダイヤルを回してトリガーを引いた。不可視の電磁波が男に浴びせられる。男はあっけにとられたように硬直した。

「グレイ浴びせた。放置すれば死ぬが、治療すれば助かる。治療して欲すれば吐け。吐かなければお前は全身を細菌に冒されて死ぬことになる」

「わ、わかった。吐くから、吐くから治療してくれ……」

エリックの脅迫に対し、男は涙目で懇願する。被曝の直後なのでまだ急性放射線症候群の症状は出ていないが、それが急速に進行し多大な苦痛をもたらすことを彼も知っているのだろう。

エリックは満足げにSRTの隊員に言った。

「こいつらを本部に連行しろ。一人は制圧中の事故でグレイ浴びたから治療が必要だと報告」

「了解です」

命令に忠実なSRTが四人の核兵器密売人を部屋から連れ出すのを見送ると、僕は肩をすくめた。子供の時分に見た古い警察ドラマの影響でなぜかATFに入局したらしい同僚に言った。

「君は相変わらず乱暴だね。治療する医者の上にもなってみろよ」

「核兵器の拡散を防ぐためだ。みんなもわかってくれる」

エリックに反省する様子は見られない。

僕は部屋から廊下に出て、鉛ガラスがはめられた窓から、眼下の道路を眺めた。雨が降りしきる中、赤と青のランプを点滅させた警察車両が走ってくる。捜査の補助のために派遣されたロサンゼルス市警の車両だ。

FBIやATFが人員不足なばかりに、市警にはいつも迷惑をかけるなど、僕は思う。

治療室と面会室を分断する鉛ガラスの向こうに、治療装置に横た

わったウーがいた。無数の管で機械に体を繋がれていたが、意識は明瞭らしく、こちらに視線を合わせている。両手両足を拘束されていなければ、ただの病人にしか見えない。

僕は面会室に用意された椅子に腰を下ろす。エリックは威圧感を与えたいのか、僕の隣に立ったままだ。僕は机の上に置かれたマイクに顔を寄せ、言葉を切り出した。

「まずは君に情報の確認をとりたい。協力してくれるかい？」

「病気を治療してくれるなら、何でも話すよ」

彼は一グレイの被曝をして急性放射線症候群を発症、医師の治療を受けている最中だった。エリックはこうして何人も治療室に送り込んでいたので医師には恨まれているに違いない。

「僕たちは《ヒューマン・ビーイング》というテロ組織のことを捜査している。君たちの拠点からは、取引相手である《ヒューマン・ビーイング》についての資料がたくさん発見された」

「俺は脅し損だったわけだ」

エリックがにやにやと笑うのを無視して、僕は続ける。

「僕はその内容について確認したい。まず彼らの攻撃の目標。君たちの文章の記述によると、《ヒューマン・ビーイング》の攻撃の目標は、ヴァージニア州アーリントン製造工場、ニューヨーク州ウエストポイント製造工場、カリフォルニア州アナハイム製造工場。これは確かか？」

「ああ。確かだ。俺が部下に調査させた」

エリックが耳打ちしてきた。

「エリート製造工場だな。アーリントンは官僚、ウエストポイントは軍人、アナハイムは科学者の適性を持つ人間を量産しようとしている。反孤児主義者が狙いそうな場所だ」

僕は続ける。

「次に、《ヒューマン・ビーイング》の最大の拠点はワシントン州シアトルにある。これも確かか？」

するとウーが逡巡の表情を見せた。すかさずエリックが面会室と治療室を隔てる鉛ガラスを手で叩いた。大きな音がして、ウーはびくりと肩を震わせた。

僕はその手を押し下げさせる。

「ウー、これは確かか？『シアトル』という言葉は暗号や符丁ではないのか？」

「俺の部下が調査した限りでは、確かだ。暗号でも符丁でもない」

エリックと小声で会話する。

「シアトルは焼け野原だぞ？」

「虚偽の場所を記載するなら、焼け野原のシアトルよりもサンフランシスコやボストンと書いた方がそれらしいとも思うな」

僕はウーに向き直った。

「文書には詳細な場所は書かれていなかった。これはお前たちにも詳細な場所がわからなかったということか？」

「ああ。《ヒューマン・ビーイング》の行動を監視したが、シアトルの近辺に拠点があることまでしかわからなかった。くそ、あんな訳の分からない組織に売るんじゃないかった」

ウーが言葉に感情をにじませた。

「仕方なく売ったのか？」

「俺は忠告したが、ワンの旦那が売ると言ってる聞かなかった。《ファイア・ボール》のもつと上層の判断があったのかもしれない。俺はそこまでは知らないし、知りたくもないがな」

「お前も奇妙な組織だと思っただけだ」

「だってそうだろう。子供だらけで素人だらけ。なのに俺たちにも奴らの拠点はわからない。そして、なのに奴らは俺たちの拠点を知っている」

その瞬間、僕は自分の誤解に気がついた。しかし、それが意味することをすぐに理解することができなかった。僕は何か嫌なものを感じ、ウーに向かって早口でまくし立てる。

「お前たちは《ヒューマン・ビーイング》に自分たちの拠点の場所を教えていないんだな？」

「取引相手といえど、教えるわけがないだろう」

僕の様子を見て余裕を取り戻したのか、ウーが続けた。

「お前たちは《ヒューマン・ビーイング》については聞き聞いてくるが、《ファイア・ボール》については聞かなくていいのか？ 俺たちの商品はロサンゼルスのごとくに眠ったままだぜ」

そこで僕は犯人の意図に気が付いた。

「調子に乗るな」

エリックが鉛ガラスを殴る音が、焦燥感に囚われた僕をむしろ落ち着かせた。僕は自分の推測を頭の中でまとめると、意図して冷静

な口調で言った。

「安心しろ、お前たちのこともちゃんと聞いてやる。核兵器保管所はどこだ。それだけは拠点の書類に記載されていなかった。言わなにとちろん、治療を中断する」

「俺たちの核兵器保管所はロングビーチの倉庫街にある。正確な場所と道順は今から言うから、よく聞けよ」

僕はそれを聞くと、さらに尋ねた。

「核兵器保管所に監視の人間はいるか？」

「本来は配置しているが、事務所が警察に制圧されたことに気付けばすぐに行方をくらますだろうな」

「それを聞いて安心したよ。現在、保管されている核兵器はブラジルの共産主義組織に販売する予定だったコバルト爆弾一発で間違いないな？」

「ああ。詳しいことはヤンに聞いて欲しいが」

「彼は君と違い組織に忠実なんだ。黙秘しているよ」

僕は面会室を出ると、すぐにSRTの出動を申請し、ロングビーチ市警に応援を要請した。そしてそれらが来るのを待たずに、僕の行動を理解できないエリックと共に車に乗り込んだ。

「ウーが供述した、《ファイア・ボール》の核兵器保管庫に」

僕たちが間に合わなかった場合、犯人たちは三発目の核兵器を手に入れることになる。その結果として何が起こるのか、僕にはまだわからなかった。

古びた倉庫が整然と建ち並ぶロングビーチの港湾を、僕たちは迅速かつ慎重な足取りで移動する。両手でX線銃を構え、攻撃に瞬時に対応できるように周辺に注意を払う。

周囲の道路にはトレーラートラックやフォークリフトが行き交っていた。時折、港湾労働者とすれ違い、X線銃を構えた姿に驚かれるが、それだけだ。ロングビーチの港湾では捕り物はそれほど珍しくない。

エリックが言った。

「つまり、犯人は最初から超小型核爆弾に加えて《ファイア・ボール》のコバルト爆弾も欲しかった。だから《ヒューマン・ビーイング》の拠点に《ファイア・ボール》の拠点が判るような情報をわざと残した」

「その通りだ。そして僕たち官憲が《ファイア・ボール》の拠点を確保し、核兵器保管所を管理する人間が逃げたところでコバルト爆弾を盗み出す」

「俺たちは泥棒の片棒を担がされたってわけだ」

エリックがなぜか嬉しそうに言った。

僕たちが《ファイア・ボール》の核兵器保管所に到着すると、すでにコバルト爆弾を原子力トレーラーに収容する作業が終わりにさしかかっていた。積み込みを終えたフォークリフトがうすらでかい原子力トレーラーからすると離れていく。

僕たちはフォークリフトにX線銃を向けた。

「特別捜査官だ！ 車を停めろ！」

するとフォークリフトから人影が転がり落ちてきた。僕はそれを薙ぐようにX線銃を照射したが、当たらなかつたらしく、人影は原子力トレーラーのコンテナの中によじ登った。

コンテナの扉が閉められ、原子力トレーラーが勢いよく発進するのを、僕たちは見送るしかなかった。僕たちはX線銃をホルスターにしまった。

「また懸案事項が増えたな」

エリックはいつそ清々しい表情で言った。

「エリック、トレーラーのナンバーは覚えたか？」

「どうせ偽装プレートだろう。似たようなコンテナトレーラーはロングビーチにゴマンと走っているだろうし、上手に隠蔽されたら検問で見するのは難しいだろうな」

しばらくすると、グローヴァーがSRTを伴い到着した。僕たちから経緯の説明を聞くと、彼は言った。

「なるほど。我々は巧妙に誘導され、犯人が三発目の核爆弾を入手する好機を与えてしまったわけだな。それにしてもコバルト爆弾とは……」

コバルト爆弾は核爆弾の周囲をコバルトで被覆したものだ。爆発すると中性子を捕獲して放射能を獲得したコバルトを周囲に撒き散らし、汚染する。ヴェトナム戦線で初めて用いられ、インドシナ半島に飢餓をもたらしたことで知られていた。

エリックが言った。

「商品が盗まれたことをワンのおっさんに告げ口すれば、怒り狂って協力してくれるんじゃないか？ 核兵器密売人のコネというのは恐らく相当なものだろう」

それに対するグローヴァーの返事は意外なものだった。

「それは不可能だ。ワン・ダングオの身柄は先刻、国防情報局に引き渡された」

「D I A？」

エリックが語尾を上げる。

「ああ。《ファイア・ボール》の武器密売に中国政府が関与しているという疑惑があり、国防総省の案件になってしまった」

「まさかタダで身柄を引き渡していないでしょうね？」

するとグローヴァーは不敵に笑った。

「もちろんだ。D I Aの情報によると、シアトルの地下には存在が秘匿された大規模シェルターが存在する。現在、ここに人間の集団が住み着いており、D I Aが調査したところ彼らがテロ組織《ヒューマン・ビーイング》であることが判明した」

「《ファイア・ボール》の情報は正しかったようだな」

「ああ。そこでケヴィンにはF B Iと共にこの《ヒューマン・ビーイング》の拠点を探索してもらいたい」

僕は驚いた。

「犯人グループはすでに三発の核兵器を所有しており、いつそれを用いて攻撃を実行するかわかりません。ここは犯人と爆弾の搜索を優先するべきでは」

「我々は犯人についてあまりにも無知だ。このままでは攻撃を阻止することはできない。だから犯人の周辺人物に接触し、彼らの正体と目的について情報を収集してきて欲しい。それは必ず犯人を逮捕するための武器となる」

「しかし、それでは犯人を搜索するための人員が……」

「それについては安心してくれ。先刻、捜査に参加する人員が拡充されることが決定した。こちらのことは我々に任せて欲しい。お願いだ」

「……わかりました。シアトルの拠点の搜索に参加します」

グローヴァーが去ると、エリックに怪訝な表情で見つめられた。

「お前があいつの指示に素直に従わないなんて、珍しいな」

「時差ボケが嫌なんだよ」

僕は言った。

ポートランドを出発し、ヴァンクーヴァーを通過すると、周囲の荒廃は明瞭なものとなった。かつてワシントン州は美しい景観で有名だったというが、今では草木が枯死した灰色の山地がどこまでも広がり、動物だか人間だかの死骸が転がっている。

州間五号線の途上にあるリッジフィールドやウッドランド、ロングビューなどの都市は、無人の廃墟となっていた。ロングビューから見えるコロンビア川の水面は、黒く沈んでいる。

「ポートランドは軍人が大勢いて賑やかだっただろうが、二十マイ

ルも北上すればこの通りだ。シアトル爆撃で発生した放射性降下物の影響で、植物は枯れ果て、動物は死に絶えた」

ハンヴィーを運転しながら解説するのは、キーガン・XT011・ギブソンだ。国防情報局から派遣された人員で、僕たちにシアトル地下都市を案内するのが役目だった。XTのロットネームはアーリントンで製造され、優秀な人間の遺伝子を受け継いでいることの証明である。

「なあギブソン、今度こそあれがレーニア山か？」

「そうだ」

「ほえー。すげえなあ」

助手席から風景を見て楽しんでいるのは、FBIのローレン・B065・リーヴスだ。ニューヨーク出身ということで、田舎の風景は物珍しいらしい。先ほどはセントヘレンズ山をレーニア山と勘違いしてはしゃいでいた。

十年前までシアトルで生活していた僕には、今のレーニア山は昔のレーニア山よりも随分とみずぼらしく感じる。緑の森と青い空で縁取られなければ、白い雪を戴いたレーニア山は映えない。今は空も森も灰色だった。

僕の隣に座るFBIのロン・エイヴリーは、無言でシアトル地下都市の記録文書を読んでいる。以前《ヒューマン・ビーイング》の拠点で会話したことのある彼は、仕事熱心というよりどうやら紙の上で書かれたものを読むのが趣味らしく、一時間ほど前まではワシントン州の地図を黙々と眺めていた。

昨日、僕は《ファイア・ボール》の核兵器保管所からロサンゼルス国際空港に直行し、チャーター機でオレゴン州ポートランドに飛んだ。陸軍基地でFBIおよびDIAと合流し、放射線防護装備と原力汎用車両を拝借、州間五号線に乗り込んだ。

ポートランドを出発してから二時間、セントレーリアを通過したところで、エイヴリーが小声で言った。

「ケヴィン。以前、ウインスローに嫌味を言われたらどう？」

エイヴリーの上司であるFBIの老捜査官の言葉を思い出し、僕は頷いた。たいした罵倒ではなかったが、あまり良い気持ちがいなかったのも事実だ。

「孤児の若造とかなんとか」

「許してあげて欲しい。僕たち家庭世代は、君たち孤児世代に恨みを持っていている者も少なくない。逆恨みだけだね。君たちが清浄食で育てられたことが僕たちは羨ましいんだ」

アメリカの人口生産が人工出生に移行するまで、清浄食は富裕層だけのものだった。大半の普通の子供は汚染食で育ったから、五十歳まで生きられない。永続戦争が勃発する以前の平均寿命は七十歳だったというから、二十年以上も短い。

「わかってますよ」

今は孤児院に優先的に清浄食が供給されている。孤児たちは生殖能力以外ほとんど健康なまま大人になることができるのだ。それを羨望と憎悪の目で見る老人がいるのは想像に難くない。

エイヴリーは微笑んだ。

「良かった。彼は勤勉で優秀な捜査官なのだが、孤児に対する感情だけはどうしようもなくね。特に外部の人間には誤解される」

「それをあなたは解いて回っているんですか。意外と信頼されているんですね、ウインスロー捜査官は」

僕は思わず嫌味を言ってしまったが、エイヴリーは何も言わずに目を細めた。それから再び手元の書類に目を落とす。僕は気まずくなり、鉛ガラスの車窓から風景を眺めた。

州間五号線はカリフォルニア州サンディエゴとワシントン州ブレインを結ぶ高速道路だ。ワシントン州は全体が居住不能地区となり一般人の立ち入りが禁止されているが、政府車両や軍事車両の通行のために州間五号線のポートランド―オリンピック間は道路が保全されていた。

しかしそれも終端に辿り着いた。グランドマウントから北上するにつれて道路の状態がどんどん悪化していき、しまいには道路そのものが掻き消えてしまった。

ギブソンが言った。

「ここからは爆撃の影響で道路が寸断されている。シアトルまでの経路は確保されているが、走り心地はだいぶ悪いぞ」

それから僕たちは道路の残骸の上を走るようになった。また崩落した高架が道路を寸断している箇所があり、そのような場所は迂回しなければならなかった。爆撃で崩壊した建物の隙間を、サスペンションを鳴らしながらハンヴィーが走り抜ける。

しばらく走っていると車外に搭載されたガイガーカウンターの警

報が鳴り始めた。ローレンがダッシュボードのモニターを見ながら嬉しそうに言う。

「お、数値上がってるねー」

「すまない。警報値を上げる」

ギブソンがボタンをいじると車内の警報は止まった。ローレンががっかりしたような顔をする。こいつはエリックと同類の不謹慎野郎だと僕は確信した。

ローレンが後部座席を振り返る。

「ケヴィンはワシントン州避難民だったよな。このあたりは爆撃の前と比べてどうだ？」

「ローレン」

エイヴリーがローレンの発言を窘める。確かにデリカシーの無い発言だが、エリックの同類の言葉だと思えば僕はそれほど悪い気がしなかった。むしろワシントン州避難民となった日のことを懐かしく思い出す。

「僕は確かに州間五号線を通ってシアトルからポートランドに逃げたけど、コンテナの中だったから覚えていないな。孤児院はメイプルリーフにあったから、このあたりに来たことは無かった」

あの日、ソヴィエトに占領されたアラスカからツポレフ原子力爆撃機が大挙して飛来していることが判明し、ワシントン州政府は州内全域に非常事態宣言を発令した。

シアトル都市圏には避難命令が発令され、市民たちは我先にと逃げ出した。しかし州立第八孤児院の職員たちは途方に暮れることに

なった。子供は千人もいるのに、バスは十台しかなかった。これでは五百人ほどの子供しか運べない。

そんな僕たちを救ったのは運送会社の運転手たちで、彼らは自分のトラックの荷台を空にすると、そこに子供たちを詰め、ポートランドまで運んでくれた。僕はフェデックスの文字が刻印された白いトラックに運ばれたことを覚えている。

運転席のギブソンが言った。

「そろそろ見えてくるぞ。シアトルだ」

道路の残骸の先に、十年前まで大都市だったそれが姿を現す。個人的には、今のギブソンの発言の方が先ほどのローレンの発言よりデリカシーに欠けるなと思った。

「ケヴィン、なんというか、ごめん」

ローレンが気まずそうに言った。

五十発の核爆弾による爆撃を受けたシアトルの中心市街は、鉄屑の山のような有様だった。

シアトル地下都市の主要な入口は地下鉄のウェストレイク駅にある。しかしその地表は十年前の核攻撃で倒壊した建物の瓦礫に埋もれているため、『ヒューマン・ビーイング』の人間たちはキャピトルヒル駅やパイオニアスクエア駅に設置された入口を利用してはいるらしかった。

僕たち偵察隊が侵入に利用したのは、パイオニアスクエア駅とウ

エストレイク駅の間にあり、ウェストレイク駅と同様に瓦礫に埋没しているため使用されていないと推測される、ユニヴァーシティストリート駅に設置された入口だった。

侵入に邪魔な瓦礫を除去するのに使うのは、もちろん超小型核爆弾だ。現在はSADMを改良した先進核爆破資材(ANDM)が配備されていて、こちらも陸軍基地から頂戴していた。

設置と起爆はギブソンが行った。彼は駅地上構造物の瓦礫の上にそれを据え置くと、五重の安全装置を解除し、確実に時限装置を起動した。慎重な動作で瓦礫から脱出し、三百ヤード離れた建物の残骸に待避、事前に待機していた僕たちと合流する。

ほどなくしてANDMが起爆した。イヤープロテクターを突き抜ける爆音の後、破砕した瓦礫が地面に落下するバリバリという轟音が連続する。

TNT換算十トンの爆発は瓦礫を綺麗に吹き飛ばした。円形の更地の中央に、地下空間に繋がる穴がぼっかりと空いている。エスカレーターを通すための穴だ。

「核爆撃の跡なら核爆発を起こしても罪悪感がないな」

ローレンが言った。

人気の無い場所ではあるものの轟音と振動を起こしてしまったので、僕たちは急ぐことにする。爆発の威力でエスカレーターは崩落してしまったため、懸垂降下で地下一階に降りた。そこからは階段でプラットフォームまで移動した。

ギブソンがプラットフォームの床面の二重ハッチを開けると、深

部に続く縦坑が現れた。側壁に梯子が据え付けられており、上り下りができるようになっていた。縦穴の底の漆黒に目を凝らしながらローレンが言った。

「もっとマシな入口はないのか？ エレベーターとか」

「あるにはあるが、当てにはできない」

「僕が最初に行こう。ギブソンは二番目だ。いきなりギブソンに死なれたら話にならないからな」

僕は言った。作戦の準備期間が短かったため、僕たちの中で地下都市の構造を把握しているのはギブソンだけだった。彼が頷いたので、僕は梯子を下り始める。

縦坑の深さは百フィートほどだった。降りた先は廊下の行き止まりのような場所だ。二人の人間が擦れ違える程度の幅の地下通路が、暗闇に向かって延びている。

遅れて降りてきたギブソンが言った。

「地下都市の本体はウェストレイクの直下にある。ここはまだまだその末端だ。先を急ぐぞ」

僕は原子力電灯を点灯する。長寿命の原子力電池を内蔵することで電池切れの心配から解放された優れたものだ。それを左手に構え、通路を歩き始めた。他の三人がそれに追従する。

ギブソンが話し始めた。

「この地下都市は来たるべき終末戦争により国土が壊滅した時、国家存続に必要な人間を生存させるために建設された。高度な空気浄化システムと水浄化システムを備え、遺伝子改良作物の栽培による

清浄食料の自給が可能。定員は千人。エネルギー源は最下層の原子炉だ。どれもアポロ計画から派生した技術だな」

僕は月面に真新しいクレーターを穿つだけに終わったと思っていたアメリカとソヴェエトの月計画に思いを馳せる。アポロ計画にはそんな良い面もあったらしい。

ローレンが不思議そうに言った。

「なんでそんなものがシアトルだけに？」

「俺はシアトルだけとは言っていないぞ」

ギブソンの言葉で疑問は解消される。

何度か通路を曲がると、わずかに広い空間に出た。奥には金属製の扉があり、その右脇の壁面にはボタンとランプが並んだコンソールが埋設されている。

ギブソンが言った。

「この扉は除染室に通じている」

「鍵はかかっているのか？ 侵入者検知用のセンサーは？」

「安心しろ。我々はこれぐらいのことは想定している」

するとギブソンは荷物の中から一枚のカードを取り出し、それをコンソールのスリットに差し込んだ。ランプの色が変わり、鍵が開くカチリという音がする。

「国防総省カードだ。終末戦争の後、この都市に避難した人間が連邦政府に従わなかった場合、あるいは敵国の人間がこの都市を占拠した場合。作業員の一人も入れないのでは困るからな」

僕たちは除染室を素通りした。

除染室より内側は照明が点っていた。通路の幅も余裕がある。人間が居住している空間になったというところで、僕たちの緊張は増大した。僕は放射線防護ヘルメットを外し、原子力電灯からX線銃に持ち替える。

僕は言った。

「あとは計画した通りだ。一人捕まえて情報を引き出す。取調室はさっきの除染室でいいな？ ギブソンは僕と一緒に来い。ローレンとエイヴリーは除染室で待機」

除染室組が引き返すのを見送ると、僕たちは移動を開始した。地下都市の奥に行くにつれて雑音が増え、遠くに人間の声のようものが聞こえるまでになった。

曲がり角の向こうを覗いたギブソンが、僕にハンドサインを寄越した。一人歩いてくるらしい。僕は後方に注意を払いつつ、不測の事態に備えてギブソンの隣に立った。

しばらくすると曲がり角に一人の男性が現れた。ギブソンは彼の肩を掴むとそのままの勢いで壁に体を押しつけ、頭にX線銃を突きつけた。幸いにも、彼は男に悲鳴か怒声を上げる暇を与えないことに成功した。

彼が格闘する間に、僕は別のことに気付いていた。一人の少女の存在だ。彼女はギブソンの背後にいて、突然の出来事に硬直していた。恐らく彼女は男の背後を歩いていたので、ギブソンに気付かれなかったのだ。

僕は咄嗟に少女に飛びかかり、右手で口を塞いで左手で抱きかか

えるように拘束した。

「指示に従えば危害は加えない」

「何もしないから静かに」

男は頭の横に置かれた金属の塊をおびえた目で見ながら首を縦に振った。ギブソンは慣れた動作で自分と相手の位置を入れ替え、X線銃を突きつけたまま男の前に立たせる。

少女はしばらく体を硬直させたままだったが、やがて苦しうに身をよじりはじめた。気が付いた僕が口を塞ぐ手を緩めると、彼女は落ち着いたようだった。

男はマークと名乗った。年齢は十八歳。青白い肌をしており、細い体も相まってあまり壮健なようには見えない。実際、晩期放射線症候群を患っているということだった。

少女はカレンというらしい。年齢は八歳。こちらも肌は青白いが動作は機敏で健康そうだった。除染室で見知らぬ四人の大人と対面したことで混乱しかけたが、マークによく懐いているようで、彼が言い聞かせるとすぐに大人しくなった。

二人が落ち着くと、僕はまず自己紹介をした。

「僕はケヴィン・UN052・ジョーンズ。アメリカ政府のアルコール・煙草・火器・爆発物局という機関の人間だ。警察の仲間だと理解してくれればいい。僕たちは君たちについて知りたくてシアトルに来た。これから質問をするから、答えて欲しい」

マークが頷くと、僕は質問を始めた。

「君は違法出生児だな。シアトル出身か？」

「いや、フェニックス生まれだ」

「何歳の頃にここに来た？ 経緯は？」

「十歳の頃。病気になって行き倒れていたところを『ヒューマン・ビーイング』に入れてもらったんだ」

僕はカレンの方を見る。

「この子はどこ出身だ？ 他の町から連れてきたのか？」

「カレンはここで産まれた。『自由の子』だ」

「ここには製造工場——人工子宮があるのか？」

「そんなものはない。カレンはミシエルから産まれた」

「ミシエルというのは女性だな。年齢は何歳ぐらいだ？」

「うーん、正確には知らないけど三十歳ぐらいだと思う」

「ここには何人の人間がいるんだ？ そのうち違法出生児は——十歳以下の子供は何人いて、十代の子供は何人いる？」

「全部で五百四人。十歳以下は二百人ぐらいで、十代は百五十人ぐらいかな」

「なるほど、ここでは古い方法での出生を続けているんだな」

「古くなんてない。僕たちの方法が正しい。僕たちはアメリカ人みたいに国家のために子供を製造しているんじゃない」

「じゃあこの人間はなんのために子供を産んでいるんだ？」

「決まっているじゃないか。人間は自分が生きるために産まれてくるんだ。アメリカでは政府が出生を掌握しているから、それが歪ん

でいるんだ」

マークは苛烈な口調で言った。

確かにアメリカは国家のために人間を製造している。僕も政府の計画に従い、国家の発展に資する人材として製造された。『ヒューマン・ビーイング』はそれを否定しているのだ。

スーザンは孤児院で、人間は自分のために生きなければならないと言った。それが自由なのだ。人間は自分のために生まれなければならないという教義は、その延長線上にあるものに乗った。

「じゃあ話題を変えよう。君たちはこの組織——『ヒューマン・ビーイング』が何をしているのか知っているのか？」

「もちろん知っている。僕たちは間違った方法で人間を産むアメリカと戦っているんだ。僕もその戦争に参加している。僕がここに来ることができたのは、戦争を手伝ったからだ」

ギブソンが僕の耳元に囁いた。

「八年前にフェニックスのアリゾナ州立第二孤児院が『汚い爆弾』によるテロを受けている」

僕は納得した。『ヒューマン・ビーイング』は安全な場所での生活を餌に違法出生児をリクルートし、テロに使っているのだ。テロを終えた子供はシアトルに持ち帰り、恐らく子供を産む役にしたり育てる役になったり、次のテロの実行犯にしたりしている。

「君はスーザン・ワイモアという女性を知っているか？」

「知っている。僕たちの母親のような存在だ」

「彼女が今どこにいるのかも？」

「ああ。どこにもいない。スーザンは死んでしまった」

少年が悲痛な表情で言ったので、僕は驚いた。《ヒューマン・ビーイング》はスーザンが死んだことを知っている。ATFもFBIも事件を公表していないのに。犯人がここに戻っているのか？ あるいは……。

「その通りだ。彼女が誰に殺されたのか知っているか？」

「ミカエラだ。あいつ、口が達者だからじいさんやばあさんに気に入られて、それに刃向かうスーザンともいがみ合ってた。それなのに戦争に連れて行くから……」

「君たちには二つの派閥があったわけだな。老人の派閥と若者の派閥。ミカエラは前者で、スーザンは後者だった。じゃあ、ミカエラは計画を中止にして何をしようとしている？」

「知らない。でもミカエラはいつも大きなことをしたいと言っていた。《国家の子》を全部滅ぼすようなことを」

背筋に悪寒が走った。《国家の子》というのは製造工場で産まれた人間のことだろう。ミカエラという少女だか女性だかはそれを地上から抹消しようとしている。

しかしコバルト爆弾があったとしてもそれは不可能だ。ニューヨーク爆撃以降、政府はリスク分散を推進している。政府の指揮系統はARPAネットにより全土に分散されているから、ワシントンDCが消滅しても統一国家を存続できる。同様にエネルギー生産も資源生産も食料生産も全土で分散されている。アメリカ全土を一度で焦土にしない限り《自由の子》を絶滅させることはできない。コバル

ト爆弾一発にそれほどの威力は無い。

そこまで考えたところでマークが言った。

「不可能だと思っているだろう。だけど彼女はやるんだ。スーザンはミカエラを甘く見ていたんだ」

マークはスーザンを母親に喩えたが、実はスーザンよりミカエラに心酔しているのではないかと僕には思えた。僕は傍らのギブソンに意見を求めたが、彼は首を横に振った。

僕は尋問の内容を整理する。《ヒューマン・ビーイング》は家庭出身者の人間や違法出生児で構成された集団で、違法出生者の勧誘や違法出生そのものにより『人口』を生産している。目的は悪い方法で人口を生産する人間を攻撃あるいは殲滅すること。

そこで僕は疑問を抱いた。

「マーク、君たちも生殖能力は失っているはずだから、凍結精子と凍結卵子を使った体外受精で子供を産んでいるはずだ。それはどこから調達しているんだ？」

少年は首を横に振った。

「わからない。それだけはじいさんやばあさんは教えてくれない」

僕は立ち上がった。

「この二人から聞き出せるのはこのぐらいだろう。もっと上部の人間——じいさんやばあさんを捕まえる。ギブソン、ANDMはあと何個ある？」

予定の時刻を過ぎた。遠方で轟音が響いたような気がするが、気がするだけかもしれない。地下にいるため無線が繋がらず、地上のギブソンとローレンの状況を確認できないが、しかしとにかく予定の時刻を過ぎたので行動を開始しなければならぬ。

僕はマークとカレンに向かって言う。

「君たちはもうどこに行っても構わない。構わないが、大人が来るまでじっとしているのが身のためだと言っておく」

僕はエイヴリーと共に除染室を出て、地下都市の中心区画に繋がる通路を走り出す。住人に発見される心配は必要なかった。すでに都市は混乱に包まれつつあったからだ。

警報装置が鳴り響き、通路の左右の扉が開いて男と女と子供が飛び出す。ある者は僕たちの行く方向に走り、ある者は僕たちの来た方向に走った。その中には放射線防護服を着ている者もあり、僕たちはそのうちの二人としてうまく紛れ込むことができた。

僕たちの作戦は単純な陽動だ。ギブソンとローレンがウェストレイク駅の直上でANDMを（百トンの出力で）爆発させ、地面を崩落させる。そしてその真下の地下都市中心区画ではちょっとした激震が起こり、混乱が発生する。侵入者を予想して迎撃に出る人間と大崩壊を予想して避難に走る人間で広くない地下都市はごった返すはずだ。

除染室を出た僕たちはその中で自由に動き回り、組織の幹部と思わしき人間を捕獲する。地位の区別は簡単で、年齢が高そうな人間であれば良い。

しかしそれがなかなか見つからなかった。高齢の人間を探し回すうちに、地下都市のかなり下層に到達してしまった。どこかの部屋で隠れ潜んでいるのではないかと部屋の中を搜索する。

それはその七個目の部屋だった。

扉を破壊して侵入すると、部屋には何体もの死体が転がっていた。どれも四十歳ほどの老人の死体だ。吐瀉物にまみれた死体は、X線銃で撃たれたものだとわかる。

そしてそれらを見下ろすように、一人の少女が立っていた。年齢はマークと同じぐらいだろうか。僕はその超然としたたたずまいに思わず見とれてしまった。

それがいけなかった。ケヴィン、と名前を呼ぶ声が聞こえたかと思うと、僕は転倒した。老人の死体の中に勢いよく倒れ込む。それからエイヴリーが崩れ落ちるのを見る。その口からは邪悪な色の血が流れていた。

エイヴリーが僕を庇いX線銃で撃たれた。僕はそう把握すると自分でも驚くほどの敏捷性を発揮して死体の中から起き上がり、人生で最速の速度でX線銃を構えた。その銃口は彼女の頭部を正確に捕捉していたが、彼女の銃口もまた僕の頭を指向していた。

僕は声を絞り出す。

「君がミカエラか？」

「そう」

彼女の言葉は羽根のように軽快だった。

「なぜ殺した？」

「この人たちが間違ったから」

「間違った？」

「そう。目的のために人間を作ってはいけないのに、目的のために人間を作ってしまったの」

「人間が生きるために産まれてくるのがこじやないのか？」

「彼らは確かにそう言っていたわ。でも本当は違う。自分の目的のために人間を作らせていたの。《国家の子》の世界を破壊し《自由の子》の世界を作るという目的のために」

僕は理解した。彼女は組織の教義を徹底したために、司祭の罪科を発見してしまったのだ。そして彼女はそれを見過ごせないほどに純真だったのだ。

「そのためにスーザンを」

「スーザンを知っているの!？」

彼女は言った。学校の友人について尋ねられた普通の少女のように、明るく健やかな謳うような声だった。

「私、子供の頃は酷い暮らしをしていたの。ご飯を食べさせてもらえないしお風呂にも入れてもらえない。逆らうと殴られたり蹴られたり犯されたりする。だからパパに『なんでわたしを産んだの?』と聞いたら『お前は俺とファックさせるために産ませた』なんて言われたりしたの。」

でもあの日、あの爆撃の日、あの人に会って、この町を作って、死体から抜いたIDで儲けて、変わった。スーザンが、パパは間違っていることを教えてくれた。私はそれで救われた。だから私はそれで

みんなを救うの」

「そのためにみんなを殺すのか？」

「そう。人間はみんな目的のために産まれてくるし、目的のために人間を産むの。だから人間はみんな間違っている。間違っているから正さないといけない。スーザンには反対されたけど、私は私のためにいる。だからスーザンから爆弾と計画を奪ったの。」

ねえ知ってる?《ヒューマン・ビーイング》はアメリカ政府のお偉いさんの命令で作られたんだ。孤児が嫌いな偉い人が、孤児が嫌いな偉くない人に命令して作らせたんだよ。ここで子供を作るのに使う精子や卵子は、孤児が嫌いなお偉いさんたちのものなんだ。地位はあるけど才能がなくて、《国家の子》の雛形になれなかった人たちが、自分たちの遺伝子を残すためにこの施設を建てたんだ。このおじさんたちが教えてくれた」

僕は叫んだ。

「それなら君はなぜ——」

「いけない。知らない人は珍しいからお喋りしていたら、こんな時間だわ。早くしないと《サードニクス》が爆発しちゃう」

部屋の片隅に兵士の背囊のようなものが置かれていることに、僕はようやく気が付いた。ノースリッジで奪われた二発の超小型核爆弾の一発だ。僕は思わず言った。

「ここを吹き飛ばすのか？」

「間違っているから——きゃあつ」

その時、彼女は本当に普通の少女のように悲鳴を上げた。見ると

彼女の足首を引っ張る手があり、それは倒れ伏したエイヴリーのも  
のだった。彼女は一瞬、姿勢を崩した。

僕はこの一瞬を逃すまいと、X線銃のトリガーを引いた。

斜線は空を切った。

そもそも姿勢を崩す瞬間の人間に射撃を命中させるなど、僕の腕  
前ではよほど運が良くなければできないのだ。

しかし、彼女がエイヴリーの手を足から振りほどいて踏み潰すま  
でにさらに少しの余裕があった。僕は転がった死体を飛び越え、部  
屋の外に飛び出した。

次は必ず復讐を果たすと誓った。

地下深部で燃え上がった出力一キロトンの核爆発は、蟻の巣のよ  
うに張り巡らされた地下都市を隅々まで舐め尽くすと、最後には直  
上に吹き上がって大地を吹き飛ばした。跡には直径二百ヤードの綺  
麗な円形の窪地が形成され、ここで人間が生活していた痕跡は残ら  
なかった。

僕が窪地の周囲に散乱した瓦礫の中を彷徨っていると、肉塊のよ  
うなものが落ちていたのを見つけた。近づいてみるとそれにはギブ  
ソンの顔が着いていた。場所は爆発の時点で彼がいたウェストレイ  
ク駅から二百ヤードも離れている。そんなに飛ばされたのだからこ  
んな襤褸雑巾のような有様なもの納得だ。

「やあ、ギブソン」

冗談で話しかけてみると、驚いたことに彼は目を開けた。瓦礫と  
共に二百ヤードも吹き飛ばされ手も足もぐちゃぐちゃで見分けが付  
かないのに、ギブソンはまだ生きていた。

さらに驚いたことに彼は口も開いた。

「ケヴィン……生きていたか。俺はもう……」

「ああ。死にそうだな」

「お前、これからどうする……」

「ミカエラを殺すよ」

「彼女は孤児を皆殺しにしたいと言っていたようだが、良い場所を  
思いついたよ」

「さすがアーリントン出身」

「オガララ帯水層」

「……」

「グレートプレーンズの地下にある水源だ。海と湖が放射能汚染さ  
れた今、アメリカで清浄な水を大量に取得できるのはオガララ帯水  
層だけだ。面積は広大だが、実質的には繋がっている。一か所をコバ  
ルト爆弾で汚染すればその汚染は全体に広が……り、アメリカの食  
料生産は大きな打撃を……」

長く話すぎたらしく、ギブソンは口から血を垂れ流し始めた。

「それは大変だ」

「ケヴィン……彼女を……て……俺たちの国を守つ……て……」

それきりギブソンは沈黙した。

彼は愛国者らしかった。

僕はキング郡国際空港に停められたハンヴィーに乗り込むと、車載無線でA T Fに連絡を入れようとした。しかし無線からは雑音が垂れ流されるばかりで、本部と通信できなかった。

僕が地下都市にいた間に付近で高高度核爆発が発生したのかもしれない。ここはまだ、アメリカとソヴィエトが睨み合うアラスカにほど近かった。

とにかくミカエラを追わなければならない。ギブソンは彼女の目的がオガララ帯水層の汚染であるという推理を披露してくれた。国を愛して死んだ彼に免じて信じてあげようと思う。

僕はダッシュボードの上に地図を広げた。グレートプレーンズの中には無数の作物工場が存在していた。これらは直下のオガララ帯水層から井戸で取水しているはずだ。帯水層を放射能で汚染するのならここにコバルト爆弾を投入するのが簡単だろう。

こうした作物工場の中でシアトルに最も近いのはワイオミング州ウィートランド作物工場だった。ウィートランドまで州間九十号線と州間二十五号線に乗り継いで十八時間、シアトル周辺の瓦礫の影響を加味すると二十時間といったところだ。

ミカエラの移動手段は恐らく原子力トレーラーだけなので、これより時間がかかる場所は選ばないだろう。今後は彼女の目標はウィートランド作物工場だという前提で行動することにする。すでに爆発から十時間が経過しており、ミカエラはウィートラン

ドまでの道程の半分まで到達していると推測できた。ここからハンヴィーで追跡しても間に合わない。

シアトル市庁舎にあるはずのARPAネットワーク端末を利用して本部に連絡をとることを思いついたが、すぐに却下する。密入国した工員に利用されることを想定してワシントン州はほぼ全域がARPAネットワークから遮断されていた。

ARPAネットワークに接続されている端末のうちシアトルに最も近いのは百五十マイル南のポートランドにあり、次に近いのは二百五十マイル東のスポケーンにある。

するとハンヴィーでポートランドまで走るのが最速ということになる。シアトルからポートランドまで五時間。ARPAネットワーク経由でポートランドからウィートランドに通報を入れ、僕は飛行機をチャーターしてもらい、三時間かけてシャイアンの空軍基地に飛ぶ。

これで情報的にも物理的にも先回りできるはずだった。僕はハンヴィーを発進させ、瓦礫の山の中をまずはオリンピックに向かうことにした。この車両の運転は初めてだったが、しばらくするとものになった。僕は乗員が一人になり身軽になったハンヴィーを楽々と走らせた。

しかしすぐに問題が発生した。道に迷ったのだ。

シアトルの周辺に堆積した瓦礫が形成した地形は想像以上に複雑で、地図を参照しながら車を走らせてもなかなか正しい経路を発見できなかった。そうして同じ場所を何度も回ったり行ったり来たり

した結果、シアトルからオリンピックまで移動しただけで五時間もの時間を消費してしまった。

オリンピックからポートランドまではほとんど直線道路なので、僕は気持ちをはつきりさせることができた。そこで試しに車載無線を使用してみるが、相変わらずATFとは連絡がつかなかった。

一人、灰色に汚染された大地を走り抜けながら、僕はスーザンとミカエラ、そして《ヒューマン・ビーイング》という組織について思いを巡らせる。

《ヒューマン・ビーイング》はそもそもアメリカ政府の要人が用意したものだった。彼らは反孤児思想で家庭出身者や違法出生者を集め、政府要人の遺伝子を受け継ぐ子供を密造した。

人口生産体制に打撃を与えるための組織でもある《ヒューマン・ビーイング》は製造工場に対する連続テロを計画した。しかしその途中にミカエラら実行者の一部が離反し、より過激な計画を実行するために超小型核爆弾を奪取して逃走した。

さらに彼らはATFを利用して《ファイア・ボール》からコバルト爆弾を強奪。シアトル地下都市に戻り超小型核爆弾で《ヒューマン・ビーイング》を壊滅させ、今に至る。

ミカエラは共に過激な思想を持つ老人たちと表向きは協力関係にあったようだ。彼らは計画の実行に際して武器や情報の提供、移動手段の調達といった援助を行ったはずだ。そもそもオガララ帯水層の汚染という計画は老人たちが発案したものかもしれない。ミカエラがシアトルに舞い戻って自分たちを殺戮するとは彼らには思いも

よらなかつただろう。

また組織はシアトル爆撃の死者から取得した偽造IDを密売していたらしい。これが事実なら《ヒューマン・ビーイング》は他の犯罪組織との接点を持っていたと推測できる。ワン・ダングオが超小型核兵器の密売を拒否できなかったのは、このあたりが原因ではないだろうか。

推測の部分もあるが、これが事件の概ね全容であるはずだ。

マークは除染室で、人間は自分が生きるために産まれてくるのだと言った。それが《ヒューマン・ビーイング》の教義だった。人間は自分が生きるために産まれてこなければならぬ。自分の目的のために人間を産んではならない。それはかつてのスーザンの言葉の延長にある。

そしてそれを最も先鋭化させたのが、ミカエラだった。彼女は《ヒューマン・ビーイング》の教義に忠実に従い、教義の達成のため、また政府の要人のために人間を産む《ヒューマン・ビーイング》を断罪した。そして国家の繁栄のために人間を製造し続けるアメリカを断罪するために、オガララ帯水層を汚染しようとしている。

オリンピックから三時間ほど車を走らせると、ポートランドの市街が見えてきた。出発から一日も経過していないが、僕にはそれがとても懐かしい風景に見えた。

ポートランドの陸軍基地に到着した僕は、ウィートランド作物工場がコバルト爆弾による攻撃を受けたことを知った。

簡単な話だった。シアトル地下都市が爆破されたときにミカエラの二人の仲間はどこにいたのかという話だ。僕たちが老人の死体の中でお喋りをしている間、彼らは州間九十号線を原子力トレーラーで走りウイトランド作物工場に向かっていたのだ。

ウイトランドでは二回、爆発が起こったらしい。最初の超小型核爆弾による爆発で施設の一部が破壊され、帯水層に繋がる深井戸の縦坑が露出。続いて原子力トレーラーで施設に突入したテロリストがコバルト爆弾を縦坑に投下し、それは地下三百フィートで爆発した。

コバルト爆弾には百キロトンの威力があり、周囲の土砂を盛大に吹き飛ばして大きなクレーターを生み出した。クレーターの底にはコバルト60で汚染された地下水が溜まり、汚染は着実に周囲に広がっているという。

僕はハンヴィーの運転席で陸軍の兵士からその話を聞くと、制止を振り切って道路を引き返した。呪詛の言葉を吐きながら、ポートランドを出てシアトルに至る州間五号線を走り抜ける。

オリンピアからシアトルまでどのように移動したのかは、はっきりと覚えていなかった。しばらくシアトル地下都市の痕跡であるクレーターの周囲を探索すると、瓦礫の中に一台の車が停まっているのを見つけた。

それはハンヴィーによく似た見た目のソヴィエト製の原子力汎用車両で、ボンネットには一人の少女が腰掛けていた。放射線防護服

を着用していたが、その佇まいは地下都市で見たそれと変わらなかつた。

ミカエラだった。

彼女は僕を見つけると無邪気に手を振りかけ、両足をパタパタと上下させた。不気味な放射線防護服を身に纏っているにもかかわらず、それはあまりにも可憐な所作だった。

「また会えた」

僕は車を降りると、彼女の元に歩いていった。

「スーザンのことを知っているみたいだから、またお話したくてここで待っていたの。またお会いできて嬉しいわ。誰かさん、あなたはスーザンとお知り合いなの？」

「ああ。僕は子供の頃、スーザンと同じ孤児院に住んでいたんだ」

「そうなんだ。スーザンはどんな子供だったの？」

「君に話したのと同じようなことを言っていた。人間は自分のために生きるべきだ、と。それが自由だと言っていた。彼女は変わっていただけ、博識で聡明だった」

「じゃあ、あなたもスーザンのことが好き？」

「ああ、そうだ。僕は彼女のことを好きだ」

「それなら、あなたも私の仲間になって。人間が自分のために産まれて自分のために生きることが出来る世界を、『自由の子』の世界と一緒に作ろうよ」

「残念だが僕は君と一緒にには行けない」

「そうなの？」

「君のように不幸な経験がないからだろうな、僕には彼女の理想に共感できなかった。僕は製造工場で産まれたことに文句はないし、国家の繁栄のために生み出されたことにも異存はない」

「ふーん」

「でもこの数日でいろいろな経験をして、僕は彼女の気持ちが少しだけ理解できた気がする。君よりも少しだけ、ね。今からそれを教えてあげよう」

僕は右手に持ったX線銃を突き出し、トリガーを引いた。不可視のX線が彼女の頭に突き刺さる。それは体内の分子に大きすぎるエネルギーを供給し、励起して暴れ回る分子は精緻な生命の構造をずたずたに引き裂いた。

「ス……かはあ、が、ああ、がっ、はあっ」

彼女は瞬時に昏倒し、地面に転げ落ちた。防塵マスクが外れ、口から血を垂れ流しながら瓦礫の上をのたうち回る。そのうちに吐き出される血はどんどん粘性を増していった。まるで内臓そのものを吐き出しているかのようなだった。

僕は語りかける。

「目的のために人間を産むことを咎めるなら、目的のために人間を殺めることも慎まなければならなかったんだ」

彼女は最後まで教義を盲信しただけで、その意味や理念を理解することはしなかったのだ。人間は自分のために生きなければならぬのだとしたら、人間を目的のために産んではいけないのだとしたら、結局、それは他人の人生を弄んではいけないからなのだ。

そこから導き出される当然の結論であり、そして大半の人間が持ち合わせる当然の倫理を、なぜか彼女は持ち合わせなかった。

「ごごっ……がはっ、うげえあ、ひゅ」

彼女は瓦礫の中で無様に体を屈曲させ、苦しそうに胸郭を上下させる。美しかった顔は怪物のような形相となり、目も口も鼻も耳も血を吹く黒い穴となって見分けがつかなくなった。

「おっ、ほっ……ぼぼ、ごぼぼっ」

僕は飽きるまでそれを眺めると、ハンヴィーに乗り込んでその場を走り去った。

彼女はあと二時間ほど苦しむはずだった。

僕はしばらく休暇を貰った後、ATFの業務に復帰した。今日もグローヴァーの指揮の下、アルコールと、煙草と、火器と、爆発物の取り締まりのために僕は走り回っている。もちろんエリックとトンソンも一緒だ。

ウィートランドがコバルト爆弾に汚染されても、アメリカはすぐには終わらなかつた。食べ物もあるし、飲み水もある。映画は見れるし恋愛もできる。殺人も強盗も強姦も起こる。ときどき上空で弾道弾が迎撃され、爆風被害と通信障害が起こる。人間は人間からではなく工場から産まれる。

でも、オガララ帯水層の汚染の拡大は問題になっていたし、清浄食の供給の減少についてもニュースで取り沙汰されていた。あと十

年すると清浄食の供給は半分になると言っていたから、健康に成人できる子供も半分になるだろう。彼女の目的が達成されるのはそう先のことではないのかもしれない。

その時、生きるために産まれてきた人間がいたらいいなど、僕は思う。

《完》

無意味に棒と歯車を回す意味のある仕事

紺野透

ずに棒を回し続ける。

今日は歯車が合計五回転半したところで、終業のベルが鳴った。

ごうん、ごうんと、だだっ広い空間に重苦しい低音が響いている。この部屋の天井は無駄に高いため、据え付けられた照明の光は手元に来るまでにずいぶん減衰してしまう。夜道の切れかけた街路灯みたいに、青白い光は頼りなく俺の手元を照らしていた。

どのような灯りに照らされようが、俺の仕事効率は毛ほども変わらないのだが。

「おい、そこお！ 足を止めるなあ！」

遠くの監視席からぎこちない怒号が飛んできた。俺の前に並ぶ数名の同僚が、気の毒そうな顔をして俺を振り返る。それで、俺が怒られているのだとわかった。相撲部屋の親方のように、部屋中の労働者を見渡せる位置に胡坐をかいた上司は、上質そうな鞭を床にびしびし叩きつけて俺を脅す。

もっとも、あの鞭が人間に振るわれたところを、俺は見たことがない。恐らく、今後も一生ない。

「すんませーん」

一言謝罪を入れた後、俺は軍手を嵌めた手で再び仕事に戻る。目の前にある木製の横棒をしっかりと掴み、足腰を使って前に押すのだ。そうやって、他の同僚たちとなんとなく息を合わせながら、俺たちは背丈の倍ほどもある巨大な歯車を回す。昼休憩一時間を含んだ計六時間の勤務時間が早く終わるよう祈りながら、俺たちは何も考え

自慢できる所と言えば珍しい町名しかなかったせに、近隣市町村との合併による町名変更により、その個性をも半ば失った町、めぐる町（昔は回の一字でめぐる」と読ませていた）。その地下には、巨大な労働施設がある。どこかの石油王が突如としてめぐる町に生み落とした、外資系の職場だ。風変わりなそこでは、専ら複数人で棒を押し回すという立派な仕事が行われていた。

「K2くん、さっきはごめんな！」

先ほどまで鞭を振るっていた上司は、控え室で俺にそう謝る。K2というのは、この職場における俺の管理番号——つまり名前だ。この上司はE13という。

「いや別に、気にしてないです。演技だって皆わかっていますし……」控えめな声で俺が言うと、上司は缶コーヒートを俺に手渡して去っていった。六時間の労働を終え、昼シフトと夜シフトの人間が入れ替わる時間、俺は控え室でタイムカードを切る。基本給に加え、今日は「怒鳴られる哀れな労働者」というロールプレイまでこなしたため、いつもより稼げたかもしれない。もちろん普段通りの可能性もある。

汚れた軍手と作業着を真新しいロッカーにしまい、温かいシャワーで汗を流すと、俺は空調のよく効いた明るい休憩室で貰った缶コーヒートを飲んだ。どんよりとした仕事部屋とはまるで違う、清潔で

現代的なバックヤード。

週休二日、時給三千円という、やりがいだけが無い破格の職場で、俺たちは石油王に夢を売っていた。俺たちは現代社会において大変貴重な「無意味な棒と歯車を回し続けるかわいそうな奴隷たち」という光景を売っているのだ。

給与システムはその最たるもので、「作業中に足かせを付ける」「よしみすぼらしい作業服を着る」などをした労働者には別途手当が付いた。劣悪な環境を演じるそれらしいロールプレイには、賞与が出ることもあってある。そのため、一部の労働者が志願する、より賃金の高いハイレベルな職場は、まさに世紀末さながらの恐ろしい様相らしい。もちろんそこでは、常人には考えられないような荒稼ぎができる。その代わり、当たり前だが辞める人も多かった。だってそれは、もはや本当の奴隷生活を味わうのと同じだからだ。

たとえそれが就業時間の間だけだとしても、俺はまだ、自分が本物の奴隷であるとは思いたくなかった。だから俺は、最低限の給与でそこそこ豊かな生活を送っている。

……いや、それさえも最近は怪しいのかもしれない。

休みの日には友達と都心へ出てたくさん遊び、そうでない日は通販で届いた荷物を開けた。楽しいはずだった。けれど休日の上り電車は、通勤電車にも似てめぐる町の住民で混み合い、似たり寄ったりの人気商品は段ボールに詰まってどの家にも届く。めぐる町という狭い地域の中で、幸福はひどく画一的なものだった。

二年前にめぐる町を飛び出していった旧友が、また町に帰ってくる。東京の低賃金と長時間労働に耐えられなくなったのだ。以前と全く変わらない二年ぶりの巨大歯車を前に、旧友は俺に言った。

「この棒と歯車だって、石油王一人のためにはなってるんだしな」  
こんな仕事に意義なんてない。俺はもつと、人のために働きたい。

そう意気込んでいた二年前の彼は、東京から帰ってこなかった。今の場には、管理番号でO46と呼ばれる男だけがいる。

返す言葉を持たない俺は、また今日もベルの音で歯車を回し始めた。

◇編集後記◇

十一月も終わりに近づき、木の葉も鮮やかに色づいてきましたね。ついこの間久しぶりにキャンパスに入る機会があったのですが、葉っぱが赤や黄色に染まっており、家の中では見れない景色を見ることができました。

本来ならばこの青衿五十二号は大学祭で発行される予定でしたが、今年は中止になり大学祭でのお披露目は叶いませんでした。来年の今頃には、今まで通りの日常が戻っていることを願わずにはられません。

大学祭は無くなってしまいましたが、青衿を開いて下さった皆さんが、私たちの描く物語を少しでも楽しんでくれれば幸いです。

編集 齋藤知優

---

青衿 第五十二号

---

◇発行者◇

東京都立大学文藝部

Twitter @tmulc

◇発行日◇

2020 年 11 月 25 日

---

執筆者

---

朝霞

風影 露

深山わたる

紺野透

---

編集者

---

齋藤知優